

俘虜抑留記（空の巻）

福岡市中央区 越迫 高一

「日本の富士は美しかった」。亡き戦友よ、安らかに眠れ、君が夢にみた祖国の土。

あの重苦しい沈痛の日から半世紀。街角から流れてくる激しいリズム、ニュースタイルに若さを包んだ青年男女、山と積んだ豊かな物資。これがあの……。後は言葉にならない。敗戦に打ちしがれた日本、ここに再生日本としての誰もが信じられないところの世界が認める50年後の輝かしい祖国があった。

眼前に今展開し演出される世紀の映像を、「吾が事成れり」と飲んでくれているであろう多くの戦没の士、戦禍の人々。新たなる大時代変遷のドラマに圧倒され、ややあって自分の存在に気付く『平成7年8月15日』の現実なのである。

その日は、南国の太陽が焼け付く、何か異様な雰囲気を感じずる無気味な時の移り過ぎるのを肌を感じるひと時であった。

突然、『ザザー』と南国特有のスクールが吾が司令部の前庭を走り抜けて去った。その時突然、終戦の玉音放送が海波何千里を越えて流れ、現地将兵は極度の緊張に茫然となった。

総てを失った人間の姿、そこに存在する哀れな自分に気が付いたのは、それからどれ程の時刻が過ぎ去ったのであったであろうか。ドッと吹き出す汗、だが今や一粒の涙すら無い自分。市街地あちらこちらから響いてくるすざましい爆竹の強烈な音は今、解放された民衆の歓喜の祝砲であろう。

いま、現実となり我が身にジリジリと押し寄せてやってくる危機感、昨日まで誰が予知し得たであろう残酷な運命との邂逅。俘虜と呼ばれ絶望の日々が近づいてくる悪魔の日。

そこには、敗戦に位置づけられた過酷を絶する「生か死か」を演出する血涙のドラマが、その行く手に待ち構えていたのである。

かつて戦勝に沸いた想い出の街々は消えて、蟻の這い出す余地も無い管理下の下、想像を絶する地獄絵が人間対人間同士の憎恨葛藤となり横行し続けられ始めたのである。

全面降伏、武装解除、勝者から敗者への「セレモニー」が実施される。一日とて身から離さなかった伝統の日本刀、武士の魂として受け継がれた愛刀との永遠の別れ、静かに1挺の拳銃と組んで彼の軍門に投げ出す運命の日の到来の時であった。

時 昭和20年8月15日の午後。

集合を命ぜられた全将兵は、嚴重なる口調で使役労務を伝達され、真裸を指示され、糞尿の充満するマンホールに次々に飛び込んで、首から上を辛うじて避けて浮遊するドロ状の黄金汚物の悪臭に抗じつつ、両手しか許されない排除作業は延々と続けられて行く。口元や目のまわりに、浮遊物は飛沫となって付着する。キラキラ光る熱砂の太陽は容赦なく、流汗は合流して落下し続けるも、いま悪臭も失う。

看視の印度兵の目は鋭く光る。少したりとも容易な姿勢にあらうものならば、手にした「チエン」の鎖が裸体の肉に食い込んでくる。

一方、広場の草むしりの労役の兵士たちには、半暴動化した現地の民衆から罵声が浴びせられ、「バカ野郎」「バカ野郎」の合唱。パッと唾を吐きかける一団、足でところ構わず蹴ってゆく民衆たち。敗戦の様相はいまや現実化し、予期し得ない局面への転移に歯を食い絞って、時の流れに身を任す以外、術も無い。

命ありて、午前の作業が漸く終了する。思い出してか鳴り止まない空腹感を静止できない肉体の自然要求、配られたのは握り飯1個のみ。強烈な黄金色の悪臭の発散する手に胃袋は喉先に手を押して催促急なり。今誰一人として黙して語る者も無い。みんなはうつろの眼で放心状態が続く。およそ10分間、するどい何やら声と午後の作業続開。筆舌に語れない作業の途次、幾多の尊い人命が帰らぬ人となってしまったことを附記をしたい。

狭いテント張りの中、10数人づつで起居する俘虜生活でのむなしの毎日の連続。1日も早く訪れるであろう日本帰還こそが、今日を生きれる明日の日への燈台であった。毎夜出沒するサソリの群れに身の安全を脅かされたことか。俘虜キャンプでは紅顔の少年兵も共同生活を営み、まだあどけない少年たちの顔に心し彼等を励ました日もあった。

暗いニュースで心泣きする毎日。2人、そして3人とチャンギー刑務所からの悲報は耐え難い苦痛となって、何も抗じ得ない敗戦の俘虜生活をひしひしと感じ、明日は吾が身に降りかかる災厄が無い保証はあり得なかった。

俘虜キャンプ地には、寺内元帥や板垣、土肥原各大将をはじめ、私の所属せし第3航空軍司令官の木下敏中将等の敗残のお姿もあった。

激戦地、昭南（現シンガポール）の司令部経理部付文官として戦地へ赴いた私は、終戦直前マレー、クアantan飛行場の設定任務を帯び、現地人を指揮してブルトラーを手押しして、荒地を整備する荒唐無稽の土木工事を黙々と作戦勤務していたのでした。平和の今日、同空港のオープンを知るとき特別の感慨を一人覚えるところです。

聖戦の名誉を背負って銃後の熱烈なる歓迎に、心ゆさぶられて出征した故国の港の船出、1億の責任に応えんものと誓った青年の日、いま脳裡をよぎる戦地での数々の場面が、パノラマとなって印象深くシャッターが響く。あの悪夢の戦争は一体何であったのだろうか。『戦争と平和』この語句の訴える語韻を肝に銘じて、世界人類にもたらす惨禍をこの地上から防止する努力を心懸けたいと思う。

流るる涙は止まらない。砲煙が消えし後にも戦犯と呼ぶ忌しい罪科を受け、祖国1億の人々の幸福を代償に、何一つ誰を責めるでも無く、従容と死刑台に散られし、あの日の遺言の一片をここに紹介させて頂いて、日本人として誇りを持たれた方々のせめてもの英霊の安らぎを合掌したいと祈念申します。

記

遺言

父上母上様

長い間色々世話にナリマシタ、今度ハ色々ナ事件ノ責任ヲ負ッテ死ンテ参リマスカ個人的破廉恥ナ事ヲシテ死ンテ行クノテハアリマセンカラ、安心シテ笑ツテ逝ケルノカ嬉シク思ハレマス。

唯御両親様ニ何一ツノ孝養モ尽サス参リマスコトカ心残りデ御座居マス

(省略)

ソレデハドウゾ何時迄モ御元気テ御過シ下サル様御祈リシテオ別レ致シマス

私ノ心ハ何時デモ思ヒ出シテ頂ク度ニ御傍近ク参リマス、子供ノ頃ト同シ様ニ可愛ガッテ下サイ、死ンダナドト嘆カヌ様ニ御願ヒ致シマス

庭前ニ若梅ヲ植エテ私タト思ツテ育テテ下サイ (省略) 弟たちへ

誰モ怨マス笑ツテ参リマス、ドウカ人ノ為ニナル様ナ御仕事ニ励ンデ下サイ

ソレデハ何時迄モ御元気デ在ラレンコトヲ祈ツテ居リマス (原文のまま)